

Title	シャミッソー『世界旅行記』研究：アメリカ大陸と南太平洋諸島でのシャミッソーの他者認識
Sub Title	Chamissos Reise um die Welt als Erweiterung von Peter Schlemihls Weg : Chamissos Betrachtungsweise der anderen Welt auf Nord- und Südamerika und Südsee-Inseln
Author	秋山, 大輔(Akiyama, Daisuke)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2008
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.25 (2008. 3) ,p.54- 66
JaLC DOI	
Abstract	<p>Man befasst sich in diesem Aufsatz hauptsächlich damit, wie Chamisso im Vergleich mit seinen Umständen als ein fremdes Wesen auf Nord- und Südamerika und Südsee-Inseln die andere Welt betrachtete.</p> <p>Chamisso hinterließ 2 Dokumente seiner Reise um die Welt (1815-18), an der er als Naturforscher teilnahm: Reise um die Welt mit der Romanzoffischen Entdeckungs-Expedition in den Jahren 1815-18 auf der Brigg Rurik Kapitän Otto von Kotzebue. Zweiter Teil. Anhang. Bemerkungen und Ansichten (1821) und [...] Erster Teil. Tagebuch (1836). Jener wurde als Nachtrag der Kapitän Otto von Kotzebues Entdeckungs-Reise in die Süd-See und nach der Bering-Straße zur Erforschung einer nordöstlichen Durchfahrt. Unternommen in den Jahren 1815, 1816, 1817 und 1818, auf Kosten Sr. Erlaucht des Herrn Reichs-Kanzlers Grafen Rumanzoff auf dem Schiffe Rurick (1821) hinzugefügt, und dieser erschien erst nach 25 Jahren, weil die durch den Druckfehler entstellten Texte hier und da zu sehen waren und dies Chamisso von Neuem zum Schreiben führte.</p> <p>Diese von dem Grafen Romanzoff ausgestattete Expedition hing eng mit der Absicht der Russisch-Amerikanischen Handelskompanie zusammen, die mit dem Lederhandel auf den Aleuten in den Vordergrund trat. Sie gab den wirtschaftlichen und militärischen Zielen den Vorrang, und es kam deshalb ihnen auf Chamissos Beschäftigung als Naturforscher gar nicht an. Von allen praktischen Zielen befreit, konnte Chamisso glücklicherweise auf Nord- und Südamerika und Südsee-Inseln unbefangen die andere Welt betrachten. Als er zum ersten Mai auf Nord- und Südamerika und Südsee-Inseln landete, sah er das Sklaventum und die Einwohner, die der schweren Arbeit der Russisch-Amerikanischen Handelskompanie untergeordnet wurden und der Mission in die Hände fiel.</p> <p>Man kann auf folgende Weise die Eigentümlichkeit von Chamissos Betrachtungsweise der anderen Welt auf Nord- und Südamerika und Südsee- Inseln nennen:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Ablehnung des Sklaventums 2. Sehnsucht nach dem Bild Der Wilde 3. Kritik über den eurozentrischen Blick auf die andere Welt <p>Wenn man Chamissos Niederschläge in seiner Reise um die Welt untersucht und sie mit Kotzebues vergleicht, ist es so zu lesen, dass er sich nach dem Bild Der Wilde sehnte. Man verstehe jedoch unter dem eurozentrischen Blick auf die andere Welt es nicht, sondern erinnere man sich an jene kosmopolitische Weltanschauung.</p> <p>Zieht man zudem Chamissos Umstände in Berlin, wo er wie Peter Schlemihl, der sich infolge von seinem Schattenverlust in der Gesellschaft als ein fremdes Wesen isoliert, als ein fremdes Wesen war, in Betracht, kann man sich davon überzeugen, dass er sich in die Einwohner auf Nord- und Südamerika und Südsee- Inseln projizierte und offenherzig sie betrachtete. Seine Eigentümlichkeit, die sein schweres Schicksal im Befreiungskrieg ihm einpflanzte, bei dem er als der in Frankreich geborene Deutsche gegen sein Vaterland kämpfen musste, widerspiegelt sich nämlich in seiner Betrachtungsweise der anderen Welt auf Nord- und Südamerika und Südsee-Inseln.</p>
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20080331-0054

シャミッソー『世界旅行記』研究

—アメリカ大陸と南太平洋諸島でのシャミッソーの他者認識—¹⁾

秋山大輔

1

本稿はアメリカ大陸と南太平洋諸島でのシャミッソーの他者認識について、彼自身の境遇と比較しながら、その特徴を考察することが目的である。

[背景1]

シャミッソーは自然研究者として参加した探検調査旅行（1815-18）で二つの世界旅行記を残している。一つはその指揮を執ったコツェブーの『世界旅行記』*Entdeckungs-Reise in die Süd-See und nach der Berings-Straße zur Erforschung einer nordöstlichen Durchfahrt. [...]*（1821）の補遺として執筆された『注釈と見解』*Reise um die Welt. [...]* *Anhang. Bemerkungen und Ansichten.*（1821）であり、もう一つはその補遺に事実を歪める誤植があまりにも多かったことに不満を持ち、十五年後に出版された『世界旅行記』*Reise um die Welt. [...]* *Tagebuch.*（1836）である。この探検調査旅行はロシア帝国宰相ロマンツォフの出資によるものであり、その目的はアリューシャン列島での皮革貿易で急成長したロシア・アメリカ貿易会社の思惑と密接な関連がある。シャミッソーはアメリカ大陸と南太平洋諸島で初めて奴隷制度や原住民を目の当たりにしたとき、ロシア・アメリカ貿易会社の重労働に隷属させられたり、宣教師によって自由を奪われたりしている原住

1) 本稿は、平成19年5月27日に立教大学池袋キャンパスで開催された日本ヘルダー学会春季研究発表会での発表原稿を基にしている。

民の悲惨な光景を知ることになる。

[仮説]

アメリカ大陸と南太平洋諸島でのシャミッソーの他者認識の特徴²⁾として次のことが挙げられる:

1. 奴隷制度を一貫して拒絶していたこと
2. 「(Der) Wilde」像を強く抱いていたこと
3. 他者に対する西洋中心主義的な視線を厳しく批判していたこと

彼の『注釈と見解』と『世界旅行記』の記述、およびこれらとコツェブーの『世界旅行記』の記述を比較しても、人間について「(Der) Wilde」という考え方が基本にあることが明確に読みとれ、それは植民地に典型的な支配者と被支配者という優劣の構造から理解できるものではなく、むしろそこには普遍的人間愛であるコスモポリタンの世界観³⁾が認められる。またシャミッソーのベルリンでの境遇を考慮すると、影を失った報いで他者として社会の中で疎外される『ペーター・シュレミールの不思議な物語』*Peter Schlemihls wundersame Geschichte* (1814)の主人公さながら、彼は植民地に自己を投影させて被支配者を観察していたとも言え、フランス生まれのドイツ人として解放戦争では祖国と対峙するという過酷な運命に晒された彼自身の他者意識が、アメリカ大陸と南太平洋諸島の被支配者に反映していると考えられる。

2) Vgl. Akiyama, Daisuke: *Chamissos Reise um die Welt als Erweiterung von Peter Schlemihls Weg.* (Herder-Gesellschaft Japan 「Herder-Studien」 Bd.12 31. Oktober 2006).

3) 拙論「コスモポリタンとしてのシャミッソー」(慶應義塾大学藝文学会「藝文研究」、第92号、平成19年6月1日)を参照。

[背景2]

シャミッソーが自然研究者として参加した探検調査旅行の航路は、次のとおりである：

- 1815年 7月15日 ベルリンを出発する。陸路、ハンブルク、キール経由で探検調査旅行用帆船「ルーリク」の乗船地コペンハーゲンに移動する。8月17日 コペンハーゲンを出航する。9月7日～10月4日 ポーツマスに寄港する。10月28日～11月1日 テネリファに寄港する。12月12日～28日 サンタカタリーナ（ブラジル）に寄港する。
- 1816年 1月22日 喜望峰を通過する。2月12日～3月8日 タルカフアーノ（チリ）に寄港する。3月8日～6月19日 大西洋を横断し、イースター島に寄港する。6月19日～7月14日 ペトロパヴロフスク（カムチャッカ半島）に寄港する。7月17日～8月29日 第一次北方調査遠征を敢行し、コツェブー海峡を発見する。9月7日～9月13日 アラスカ（アリューシャン列島）に寄港する。10月2日～1月11日 サンフランシスコに寄港する。11月22日～12月14日 ハワイに寄港する。
- 1817年 1月1日～3月13日 ラタクに寄港する。4月25日～6月29日 アラスカ（アリューシャン列島）に寄港する。6月29日～7月12日 第二次北方調査遠征を敢行する（後に中断）。7月22日～8月18日 アラスカ（アリューシャン列島）に寄港する。9月28日～10月14日 ハワイに寄港する。10月31日～11月5日 ラタクに寄港する。11月24日～29日 グアムに寄港する。12月17日～（1818年）1月29日 マニラに寄港する。
- 1818年 2月14日 スンダ海峡を通過する。3月31日～4月8日 ケープタウンに寄港する。6月16日～30日 ポーツマスに寄港する。12月7日 コペンハーゲンに復航する。10月31日 ベルリンに到着する。⁴⁾

この探検調査旅行の目的は、北西航路を発見し調査すること、ナポレオン戦争で封鎖されていたロシア・アメリカ貿易会社の貿易圏を正常に戻すことなどである。これはアリューシャン列島での皮革貿易で急成長したロシア・アメリカ貿易会社の思惑と密接な関連があり、折にふれて経済に関わる目的が最優先されたことは言うまでもない。したがって自然研究者——厳密に言えば、植物学者である——としてのシャミッソーの働きはまったく重要ではなかったのであるが、それが幸いし彼はこの探検調査旅行で自由に対象を観察することができたと考えられる。

このようにシャミッソーが自然研究者として参加した探検調査旅行の背景を簡潔に整理した上で、アメリカ大陸と南太平洋諸島での彼の他者認識の特徴を考察する。

3

[考察]

シャミッソーはアメリカ大陸と南太平洋諸島で初めて奴隷制度や原住民を目の当たりにしたとき、ロシア・アメリカ貿易会社の重労働に隷属させられたり、宣教師によって自由を奪われたりしている原住民の悲惨な光景を知ることになる：

[サンタカタリーナ (ブラジル)] (1815年12月12日～28日)

私たちはここで奴隷貿易が今なお真っ盛りであるのを目撃した。サンタカタリーナ政府が必要としていたのは、プランテーションで死んだ黒人奴隷を補充するために、1隻につき100人くらいの黒人奴隷を乗せた奴隷貿易船が年間5-7隻やってくることだった。ポルトガル人は彼らをコンゴやモザンビークの植民地から連れてきた。男性の黒人奴隷は1人あたりの値段が最もよい時で200 - 300ピアスターにもなったが、女性の

4) Vgl. Zeittafel. In: Adelbert von Chamisso: Sämtliche Werke. 1. Band, Hg. Jost Perfahl, München 1975, S.659.

黒人奴隷はそれよりもずっと安価だった。1人の黒人奴隷のすべての力を吸い尽くし、それを新しく買うことによって補充する方が、彼らを家で養い教育するよりもずっと効率的だと考えられる。……木臼の中の米を重い棍棒で脱穀する製粉機のあるところで働かされている黒人奴隷の光景は、彼らが独特の調子で呻くので、それは苦痛に満ち溢れ胸を締めつけるものである。ヨーロッパでは風や水や蒸気がそのような仕事をしている。⁵⁾

[アラスカ (アリューシャン列島)] (1816年9月7日～9月13日)

筆者にはアリューシャン列島やロシア・アメリカ貿易会社のことを話す資格はない。ただ傷ついた心と哀れみの気持ちを表現することができるだけだろう。古いしきたりに従って無防備の民族が生まれつき持っている自由のための権利を無視する者は、このような厳しい空の下では、貧しい者たちが悲惨な状態であることを認めなければならない。⁶⁾

[サンフランシスコ] (1816年10月2日～1月11日)

「Der Wilde」は軽率に宣教団に近づいて来て、喜んで食べ物を受け取り、教えに耳を傾ける。彼らはまだ自由である。しかし洗礼を受けると、教会に属し、むなしい憧憬を抱きながら故郷の山々を振り返ることになる

5) Chamisso, Adelbert von: Reise um die Welt mit der Romanzoffischen Entdeckungs-Expedition in den Jahren 1815-18 auf der Brigg Rurik Kapitän Otto von Kotzebue. Erster Teil. Tagebuch. In: Adelbert von Chamisso: Sämtliche Werke. 2. Band, Hg. Jost Perfahl, München 1975, S.51. Zitiert wird unter dem Abkürzungszeichen „Erster Teil. Tagebuch“.

6) Chamisso-, Adelbert von: Reise um die Welt mit der Romanzoffischen Entdeckungs-Expedition in den Jahren 1815-18 auf der Brigg Rurik Kapitän Otto von Kotzebue. Zweiter Teil. Anhang. Bemerkungen und Ansichten. In: Adelbert von Chamisso: Sämtliche Werke. 2. Band, Hg. Jost Perfahl, München 1975, S.494. Zitiert wird unter dem Abkürzungszeichen „Zweiter Teil. Anhang. Bemerkungen und Ansichten“.

のである。……「Der Wilde」は軽率であり、子供のように気まぐれである。慣れない仕事は彼らにとっては厳しいものである。今自分を縛りつけることになった歩みを後悔する。生まれつき持っている自由を憧憬する。故郷への愛が彼らの心の中で大きくなる。……彼らのところに派遣された宣教団が彼らに見せつける侮蔑は、私たちの目には不幸な境遇だと感じられる。なぜなら宣教団の誰もが彼らの歴史や慣習や信仰や言葉に心を配っていないように感じられるのだから。⁷⁾

これらから読みとれることは、植民地での西洋諸国の活動を省察する視点がシャミッソーに認められることであり、それは『注釈と見解』、『世界旅行記』のいずれにおいても一貫していることから、彼の他者認識の特徴の一つであると考えられる。

イースター島でシャミッソーは初めて南太平洋諸島の原住民を目にし、そして彼らについての記述の中で、彼の『世界旅行記』に初めて「(Der) Wilde」という言葉が登場する：

[イースター島] (1816年3月8日～6月19日)

私はここで南太平洋諸島の原住民を「Wilde」と呼ぶことに対して改まった態度で抗議する機会をつかんでいる。私は自分が用いる言葉にはできるかぎりしかるべき概念を結びつける。私にとっての「Ein Wilder」とは、定住の地、耕作地、家畜を持っておらず、狩猟によって暮らしを立てるための武器以外の所有物を知らない人間のことである。ここの風俗の退廃が南太平洋諸島の原住民のせいにはされるならば、それは「Wildheit」であることによるものではなく、むしろ過度に開化した文明によるものであると考えられる。私たちの大陸の民族が立っている開花した文明の異なった段階を測るのに適したいくつかの発明品や貨幣や文字などは、あまりに異なる条件の下では、つまりこの島のように隔離して暮らす人間たちには基準を与えなくなる。……⁸⁾

7) Ebd. S.279-280.

「(Der) Wilde」には「野蛮人」、「野生人」、「未開人」などの日本語訳があてられる。これに関連して、「Der edle Wilde 高貴な野蛮人」という概念に触れなければならない。これはアフリカや南太平洋諸島の発見によって西洋の知識人が思い描くようになった幻想の一種である。ここでは自然と調和した生活を営み、純真無垢な原住民の生活と風俗が、文明によって墮落した西洋人に対置され、肯定的に評価される。しかしこれは探検調査旅行に代表される覇権主義によってもたらされた否定的な概念でもあり、そこに他者に対する支配的な視線が絶えず見え隠れすることは言うまでもない。一方、シャミッソーも「Der Wilde」という観点でアメリカ大陸と南太平洋諸島の原住民に視線を向け、彼らが純真無垢であることを肯定的に評価している。しかしそれが「Der edle Wilde 高貴な野蛮人」についての伝統的な概念のように郷愁に駆られてのものではなく、西洋中心主義的な視線を問題視していることから、彼にとっての「(Der) Wilde」の概念は、それとは異なる意味を持つものであると考えられる。

シャミッソーが探検調査旅行でハワイ・ホノルルを訪れたとき、そこはすでに西洋の文化的な影響下にあった：

[ハワイ・ホノルル] (1816年11月22日～12月14日)

私たちは……西洋式に建てられた家々が……原住民の藁葺き屋根を見下しているように建っているのを目撃した。⁹⁾

羞恥心は私にとって人間に生まれつき備わっているもののように思われるが、貞操はおよそ私たちの教義に従えば、美德である。……愉悦や歓喜に身を委ねることをよしとするこの民族にとって美德としての貞操は馴染みのないものだった。私たちがこのような人々に所有欲や利欲を植えつけ、羞恥心の皮を剥いたのである。墮落した港町の人々から離れたこ

8) Erster Teil. Tagebuch . S.74-75.

9) Ebd. S.123.

の島の北岸では、父権制度を守る非の打ちどころのない慣習が見られる
 と思いでいたのであるが。¹⁰⁾

12月4日と6日にカライモクが、私たちのためにフラダンスを催して
 くれた。私たちはバレエと称して、バレリーナのとる無理な姿勢をやたら
 に賞賛しているが、私がかつてバレエの素晴らしさについて述べたこ
 とは、まったく色褪せてしまい、観るにふさわしくないものだと感じら
 れる。私たちこそが「Barbaren」であったということだろう。あの美意
 識の才能に恵まれた人々を「Wilde」と呼ぼう。そして私たちが芸術に
 捧げていると自慢している劇場の中から、恥ずべき劇作家や嘆いている
 役者にバレエを排除させよう。¹¹⁾

ここでシャミッソーは西洋人を「barbar」、原住民を「wild」と規定し、そ
 れらが彼にとって対立的な概念であることを表明している。すなわち彼に
 とっての「(Der) Wilde」というのは、肯定的な概念として、しかも植民地
 における西洋諸国の活動を省察し、他者に対する西洋中心主義的な視線を
 厳しく批判する文脈でのそれとして理解されなければならない、ひいては彼
 はここに至って、人間のあるべき姿としてこの「(Der) Wilde」という考え方
 を確信したと言える。

4

ここまでの考察を整理すると、アメリカ大陸と南太平洋でのシャミッソ
 ーの他者認識の特徴として挙げられるのは、次のとおりである：

1. 奴隷制度を一貫して拒絶していたこと
2. 「(Der) Wilde」像を強く抱いていたこと
3. 他者に対する西洋中心主義的な視線を厳しく批判していたこと

10) Ebd. S.131.

11) Ebd. S.137.

[ラタク] (1817年1月1日～3月13日)

私たちは真っ先に、そして主としてオディアの一群でラタクの優美な民族を知った。私たちの方に向かって愛想よくやってくる人々は、しばらくの間、私たちの優越性を感じて、しり込みしていたように感じられる。……私たちの圧倒的な豊かさと自分たちの貧しさを比べることによって、彼らが物乞いにはしることは決してなく、盗みに誘惑されることも稀で、節操を破ったことはなかった。……どこにいても私たちの目の前には発展途上の民族の平和の姿があり、……酋長と従者の間は平等であること、権力者にへりくだることはないこと、そして赤貧とわずかばかりの自信では東部のポリネシアの民族性を歪めているような悪徳は何も姿をのぞかせないことを私たちは目撃した。¹²⁾

マーシャル諸島ラタクの原住民について、シャミッソーはこのようにいくつかの特徴を挙げて、彼らに「(Der) Wilde」の姿を見ている。

[ラタク] (1817年1月1日～3月13日)

1月24日に鍛冶屋が島に作られた。この鍛冶屋には途方もなくたくさんの鉄があり、それはそこに寝泊りしていたたった一人の船員の保護下にあった。数日後のある日、一人の初老の男が一塊の鉄を強奪しようとしたが、その途中で彼は憤慨した男衆によって力づくで阻止された。これを盗みと呼ぶことはできない。¹³⁾

酋長たちに特別な畏敬の念が表明されなくても、彼らはすべての財産に任意の権利を行使する。私たちから贈り物を渡された酋長がより権力のある部族の酋長に対してそれを隠しているのを私たちはこの目で見た。彼らにはいくつもの階級があり、お互いに従属しているようである。私

12) Zweiter Teil. Anhang. Bemerkungen und Ansichten. S.405-406.

13) Erster Teil. Tagebuch. S.155.

たちにはその関係を見抜くことはできない。¹⁴⁾

これらも同じくラタクの原住民についての記述であるが、一見彼の「(Der) Wilde」像を覆す反駁例として読むという誤謬を犯しがちである。しかし彼には人間について「(Der) Wilde」という考え方が基本にあること、ならびに彼がアメリカ大陸と南太平洋諸島での他者認識では西洋の価値観を当てはめるべきではないという趣旨のことを指摘していることをあわせて考えると、これらはむしろ彼の他者認識の特徴を裏づける記述として読まなければならない。このことについては、この島で発生した盗みをめぐるシャミッソーとコツェブーの態度表明を比較すると、シャミッソーの他者認識の特徴、すなわち植民地での西洋諸国の活動を省察し、他者に対する西洋中心主義的な視線を厳しく批判する文脈での肯定的な概念としての「(Der) Wilde」の考え方がより鮮明になる：

原住民が私たちの生活用品を試しに試してみようと決心したのは初めてのことだったが、……残念ながら私たちを信頼するにつれて盗癖が発揮され、ラリク自身はその悪い例になってしまった。ぴかぴかに輝く銀色のスプーンが彼の目に止まり、その中の一本をベルトの内側に隠そうとしたが、私たちがそれに気づいたので、彼は冗談を口にしながらそれを返したということがあった。船員たちが水を飲むときに使う銅製の升がなくなったものの、長らく探し回っていると、茂みの中でうまい具合に隠された状態で見つかったということもあった。ここではこれまで何かがなくなったことは決してなかったもので、盗みという悪徳が彼らにとって未知のものであるとつくづく思った。そのことに驚き、なおいっそう不機嫌になった。私はその場にいた者たちに不満を言って、私たちの友が誘惑に陥らないように、部下にはこれからよりいっそう注意深くなるように命じた。¹⁵⁾

14) Zweiter Teil. Anhang. Bemerkungen und Ansichten. S.408-409.

15) Kotzebue, Otto von: Entdeckungs-Reise in die Süd-See und nach der Bering-Straße

以上のとおり、シャミツソーの「(Der) Wilde」の考え方は、植民地に典型的な支配者と被支配者という優劣の構造から理解できるものではなく、むしろその背景には普遍的人間愛であるコスモポリタンの世界観があると考えなければならない。また彼のベルリンでの境遇を考慮すると、影を失った報いで他者として社会の中で疎外される『ペーター・シュレミールの不思議な物語』*Peter Schlemihls wundersame Geschichte* (1814)の主人公ながら、彼は植民地に自己を投影させて被支配者を観察していたとも言え、フランス生まれのドイツ人として解放戦争では祖国と対峙するという過酷な運命に晒された彼自身の他者意識が、アメリカ大陸と南太平洋諸島の被支配者に反映していると考えられる。

(慶應義塾大学大学院後期博士課程在学中)

zur Erforschung einer nordöstlichen Durchfahrt. Unternommen in den Jahren 1815, 1816, 1817 und 1818, auf Kosten Sr. Erlaucht des Herrn Reichs-Kanzlers Grafen Rumanzoff auf dem Schiffe Rurick. Weimar 1821. Bd.2, S.66.

Chamissos *Reise um die Welt* als Erweiterung von Peter Schlemihls Weg

—Chamissos Betrachtungsweise der anderen Welt auf Nord- und
Südamerika und Südsee-Inseln—

AKIYAMA, Daisuke

Zusammenfassung

Man befasst sich in diesem Aufsatz hauptsächlich damit, wie Chamisso im Vergleich mit seinen Umständen als ein fremdes Wesen auf Nord- und Südamerika und Südsee-Inseln die andere Welt betrachtete.

Chamisso hinterließ 2 Dokumente seiner Reise um die Welt (1815-18), an der er als Naturforscher teilnahm: *Reise um die Welt mit der Romanzoffischen Entdeckungs-Expedition in den Jahren 1815-18 auf der Brigg Rurik Kapitän Otto von Kotzebue. Zweiter Teil. Anhang. Bemerkungen und Ansichten* (1821) und [...] *Erster Teil. Tagebuch* (1836). Jener wurde als Nachtrag der Kapitän Otto von Kotzebues *Entdeckungs-Reise in die Süd-See und nach der Bering-Straße zur Erforschung einer nordöstlichen Durchfahrt. Unternommen in den Jahren 1815, 1816, 1817 und 1818, auf Kosten Sr. Erlaucht des Herrn Reichs-Kanzlers Grafen Rumanzoff auf dem Schiffe Rurick* (1821) hinzugefügt, und dieser erschien erst nach 25 Jahren, weil die durch den Druckfehler entstellten Texte hier und da zu sehen waren und dies Chamisso von Neuem zum Schreiben führte.

Diese von dem Grafen Romanzoff ausgestattete Expedition hing eng mit der Absicht der Russisch-Amerikanischen Handelskompanie zusammen, die mit dem Lederhandel auf den Aleuten in den Vordergrund trat. Sie gab den wirtschaftlichen und militärischen Zielen den Vorrang, und es kam deshalb ihnen auf Chamissos Beschäftigung als Naturforscher gar nicht an. Von allen praktischen Zielen befreit, konnte Chamisso glücklicherweise auf Nord- und Südamerika und Südsee-Inseln unbefangen die andere Welt betrachten. Als er zum ersten Mal auf Nord- und

Südamerika und Südsee-Inseln landete, sah er das Sklaventum und die Einwohner, die der schweren Arbeit der Russisch-Amerikanischen Handelskompanie untergeordnet wurden und der Mission in die Hände fiel.

Man kann auf folgende Weise die Eigentümlichkeit von Chamissos Betrachtungsweise der anderen Welt auf Nord- und Südamerika und Südsee-Inseln nennen:

1. Ablehnung des Sklaventums
2. Sehnsucht nach dem Bild *Der Wilde*
3. Kritik über den eurozentrischen Blick auf die andere Welt

Wenn man Chamissos Niederschläge in seiner *Reise um die Welt* untersucht und sie mit Kotzuebues vergleicht, ist es so zu lesen, dass er sich nach dem Bild *Der Wilde* sehnte. Man verstehe jedoch unter dem eurozentrischen Blick auf die andere Welt es nicht, sondern erinnere man sich an jene kosmopolitische Weltanschauung.

Zieht man zudem Chamissos Umstände in Berlin, wo er wie Peter Schlemihl, der sich infolge von seinem Schattenverlust in der Gesellschaft als ein fremdes Wesen isoliert, als ein fremdes Wesen war, in Betracht, kann man sich davon überzeugen, dass er sich in die Einwohner auf Nord- und Südamerika und Südsee-Inseln projizierte und offenherzig sie betrachtete. Seine Eigentümlichkeit, die sein schweres Schicksal im Befreiungskrieg ihm einpflanzte, bei dem er als der in Frankreich geborene Deutsche gegen sein Vaterland kämpfen musste, widerspiegelt sich nämlich in seiner Betrachtungsweise der anderen Welt auf Nord- und Südamerika und Südsee-Inseln.